

## 関西大学文化交渉学

ICIS NEWS LETTER

## ニューズレター



## CONTENTS

- 文化交渉研究とデジタル・ヒューマニティーズ
- 東アジア文化交渉学会  
第14回国際シンポジウム開催報告
- 図書の出版
- 研究班活動報告
- 関西大学東西学術研究所  
創立70周年記念シンポジウムの開催



## 文化交渉研究とデジタル・ヒューマニティーズ

関西大学文化交渉学研究拠点(ICIS)としての今期の研究班活動が2022年3月31日に終了しました。ICISは、複数の地域間や文化間に生じる「交渉」という側面に着目した学問領域の進展を担う研究拠点として東西学術研究所内に設置され、今期は、言語交渉、東アジアの思想と芸術の文化交渉、ユーラシア歴史文化の3研究班がそれぞれの研究テーマに沿って研究活動を行い、研究例会の開催、出版物の刊行、研究成果の公開を行いました。

出版物刊行に関しては、資料集の刊行に力を入れたこと、研究成果公開に関しては、データベースの公開にまで達したことが、当該分野の研究に貢献する活動として、特に注目に値するものです。

研究例会に関しては、海外の研究者による研究発表が多く見られました。COVID19のために増加したオンライン会議によって海外からの参加がより容易となったという特殊な事情はあるものの、海外からの参加者の多さは、その研究成果が日本の文化交渉研究の発展に欠かせないものであることの現れのひとつだと言えるでしょう。

国際的な研究あるいは、研究における国際的な協力の必要性は、今ことさらに言うことではありませんが、人文情報学(デジタル・ヒューマニティーズ、DH)という研究手法については、それは比較的新しい研究手法であり、現状では日本より海外の

方が進んでおり、多くの日本の研究者にとってはまだ馴染みのない研究手法であり、新鮮な響きを持つものかもしれません。日本では研究手法のみならず、その研究手法を取り入れるためのさまざまな環境—デジタルアーカイブの構築、テキストデータベースの作成、それらをインターネット上で持続的に公開するプラットフォームなど—の整備もこれからの課題です。

海外に目を向ければ、DHのための環境整備や、その手法を用いた研究に携わる人々が増加しつつあります。今後、私たち自身が自分の研究にDHの手法を取り入れようが取り入れまいが、DHの手法によって得られた研究成果とは無関係ではあり得ない時代がやってきて、私たちの研究を助けてくれることが予想されます。文化交渉研究にも大きな恩恵があるだろうと期待しています。

関西大学文化交渉学は、従来の研究手法に加え、今後はよりいっそうDHの取り組みを強化するという志と目標をもち、研究活動を継続していきます。



奥村 佳代子  
(関西大学文化交渉研究拠点)  
(2022年3月末まで)拠点リーダー

# 東アジア文化交渉学会 第14回国際シンポジウム開催報告

## 東アジア文化交渉学会 第14回国際シンポジウムの開催について

2022年5月7日(土)、8日(日)の両日、韓国啓明大学校国際学研究所主催、東アジア文化交渉学会、韓国研究財団後援の下、「パンデミックが国際交流に及ぼした影響の歴史的検討とコロナ越えへの展望を考える」を総合テーマに、下記の分科会テーマを中心に研究発表を行った。



啓明大学国際学研究所・東アジア文化交渉学会共同主催第十四回年次大会

1. 東アジアにおける感染症 (COVID19を含むパンデミック) の歴史的な事例
2. パンデミック後東アジアにおける国際交流への展望
3. 知識環流の世界史
4. 公衆衛生・伝染病・製薬と文化交渉
5. 帝国/民族/地域の知識交渉
6. 言語/文学、歴史、哲学の翻訳と知識の移動
7. 芸術における文化交渉
8. 社会福祉事業における文化交渉
9. 地域文化と観光に見える文化交渉
10. その他東アジア文化交渉に関連する内容

新型コロナウイルス感染拡大の中、2022年度の東アジア文化交渉学会国際学術大会は、3年連続オンラインの形式にて開催せざるを得なかった。しかしそのような悪条件にもかかわらず、会員は積極的に参加し、研究発表や学術交流を行った。大会はオンラインの開幕式に続き、李盛煥(LI Sheng Huan)啓明大学人文国際学大学院教授、同国境研究所所長と万明(WAN Ming)中国社会科学院研究員がそれぞれ「私と韓国の東アジア論」、「何以全球化:明代白銀貨幣化視角的考察」と題する基調講演を行い、また翌日、齋藤希史東京大学大学院教授が「拡張された漢詩文—新たな文体と意匠の資源として」と題する基調講演を行った。大会は2日におよび、7つの分科会で、175名の会員が最新の研究成果を披露した。延べ300人以上の参加者は、発表を視聴し、討論に参加した。期待以上の盛会であった。

2023年度年次大会は、「東アジア文化の融合とイノベーション」という総合テーマで中国天津南開大学にて、開催することが決定した。

来年こそ、対面で発表し、交流したいと願う次第である。



(外国語学部 沈 国威)

## 図書の出版〈関西大学出版部発行〉

### ■ 関西大学東西学術研究所 資料集刊50

#### 内藤湖南の人脈と影響

— 関西大学内藤文庫所蔵還暦祝賀  
及び葬祭関連資料に見る —

陶 徳民 編著

2022年3月発行/246ページ



### ■ 関西大学東西学術研究所 資料集刊51

#### 北京官話資料8種『京華襍拾』

— 解題と影印・語彙索引

内田 慶市 編著

2022年3月発行/374ページ



### ■ 関西大学東西学術研究所 資料集刊27-10

#### 家礼文献集成 日本篇 十

吾妻 重二 編著

2022年3月発行/358ページ



# 研究班活動報告

## 言語交渉研究班

本研究班は、東アジアの言語間、あるいは特に中国語と日本語と、欧米言語との言語接触を中心にし文化交渉をめぐる諸問題について各研究員がそれぞれ研究に取り組んだ。3年間に開催した研究例会は、以下のとおりである。

- |        |          |   |                                   |
|--------|----------|---|-----------------------------------|
| 2019年度 | 第1回研究例会  | (4月20日開催)                                       | 国際シンポジウム「学科、知識、詞語與近代中国」           |
|        | 第2回研究例会  | (6月15日開催)                                       | 「東西文化の翻訳のかたち—聖像画の変容を中心に」          |
|        | 第10回研究例会 | (11月30日開催)                                      | 国際ワークショップ「敦煌写本の諸相」                |
|        | 第14回研究例会 | 2020年<br>(1月24日開催)                              | 「言語接触研究の諸相」                       |
| 2020年度 | 第1回研究例会  | (7月17日開催)                                       | 「言語接触研究の可能性」                      |
|        | 第10回研究例会 | 2021年<br>(2月19日開催)                              | 「文化交渉と言語接触」                       |
| 2021年度 | 第2回研究例会  | 11月6日、7日、<br>(東アジアの思想と<br>芸術の文化交渉研究班<br>との共同開催) | 国際シンポジウム<br>「内藤湖南と石濱純太郎—近代東洋学の射程」 |
|        | 第9回研究例会  | 2022年<br>(3月13日開催)                              | 「荒川清秀氏追悼・近代言語接触研究シンポジウム」          |

以上。



「荒川清秀氏追悼 近代言語接触研究シンポジウム」ポスター

(主幹:奥村 佳代子)

## 東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班



上:シンガポール双林寺  
下:安齋川藤樹書院

東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班は2019年4月から発足した。主幹は中谷伸生教授で、研究員は吾妻重二教授、陶徳民教授、二階堂善弘教授、酒井真道教授、長谷部剛教授である。

2019年7月29日に「近代日中の学術と芸術への新しいアプローチ—古今・東西の文化交渉と融合の視点から—」というテーマで、2019年度第5回例会が開催された。

2019年9月には、酒井真道教授が「日本印度学仏教学会賞」を受賞された。

2019年12月20日には、2019年度第12回例会として、「中国・日本の宗教と儀礼をめぐる」が開催された。

2020年1月21日には、「近現代日本・中国・西洋の相互理解と文化交渉」とのテーマで、第13回例会が開催された。

2020年3月に、中谷伸生教授が退任される。

吾妻重二教授が東西学術研究所の所長に就任したため、2020年10月より研究班の主幹が交代した。二階堂善弘教授が主幹を担当することになった。

2021年1月9日、「道教・民間信仰の変容と展開」というテーマで、2020年度第6回研究例会を行った。新型コロナの影響により、オンラインで開催した。

2021年1月15日には、「羅振玉の学術と芸術への新しいアプローチ」というテーマで第7回研究例会を行った。新型コロナの影響により、オンラインで開催した。

2021年11月6日と7日には、国際シンポジウム「内藤湖南と石濱純太郎—近代東洋学の射程」が開催された。これは同時に2021年度第2回例会となる。オンラインで開催され、多くの参加者があった。

(主幹:二階堂 善弘)

## ユーラシア歴史文化研究班

今期の活動は、新型コロナウイルスのまん延等により、大きな影響を被り、研究員が対面で会して研究活動を行うことに大きな制約が生じた。また、初年度の2019年度は篠原研究員と澤井研究員が在外研究のため不在であったことも、研究活動に影響があった。

その中で、新型コロナウイルスの感染拡大の直前の2019年10月26日に「中国王朝の「異民族」統治方法に関する問題と考察」をテーマとした研究例会を開催した。これは、研究班主幹の森部の科研費補助金による



南山新城碑第9碑、慶州、591年

研究成果の報告を合わせたものであり、新出の石刻史料を利用し、唐朝の異民族支配の形態である「羈縻支配」の通念的理解を再考する出発点となった。この成果は報告書としてまとめた。

2020年度は、前年、篠原研究員と澤井研究員による在外研究の成果をもふくめた報告を研究例会で行い、ユーラシアの食文化と東アジアの石碑についての成果が公表された。2021年度は「トルコ系遊牧王朝とその周辺」というテーマを設定し、文献史料、石刻史料、考古学的発掘調査報告という異なるアプローチから、西突厥およびウイグル帝国という遊牧王朝へアプローチし、最新の研究成果が示された。



上:イスタンブルにある  
ウイグル料理店のピラフ(ポロウ)  
下:ウズベキスタンの肉饅頭(マンティ)

(主幹:森部 豊)

## 関西大学東西学術研究所創立70周年記念シンポジウムの開催

昨年の令和3年(2021)は東西学術研究所の創立70周年に当たっており、2日間にわたって記念シンポジウムを開催した。

当研究所が設立されたのは昭和26年(1951)年、戦後6年目のことで、当時、本学における人文学研究所の設立を考えていた理事長宮島綱男が、戦後文学部教授となった石濱純太郎に依頼して設立されたものである。石濱が近代東洋学におけるパイオニアの一人であったことはいうまでもないであろう。



基調講演にオンライン参加の陳来教授(左)と高宮教授(右)

今回のシンポジウムは中国・清華大学の陳来教授、慶應義塾大学の高宮名誉教授のオンラインによる基調講演に始まり、さらに全8研究班から原則2名ずつが発表、現在、当研究所がどのような研究を行なっているのか、その最新の成果を発信する重要な機会となった。

プログラムは次のとおりである。



10月30日(土)

学長挨拶 前田 裕(学長)

開会挨拶 吾妻 重二(東西学術研究所所長)

基調講演

陳 来(清華大学哲学系教授、清華大学国学研究院院長)

高宮 利行(慶應義塾大学名誉教授)

研究発表

「言語交渉研究班」玄 幸子(研究員)、沈 国威(研究員)

「都市遺産と宗教文化研究班」

西本 昌弘(主幹研究員)、原田 正俊(研究員)

「ユーラシア歴史文化研究班」

藤田 高夫(研究員)、吉田 豊(客員研究員)

10月31日(日)

研究発表

「西洋文学における信仰とフィクション研究班」

ローベルト・F・ヴィットカンプ(研究員)、

朝治 啓三(客員研究員)

「東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班」

二階堂 善弘(主幹研究員)、陶 徳民(研究員)

「身体論研究班」

小室 弘毅(研究員)、岡村 心平(客員研究員)

「風景表象研究班」

野間 晴雄(主幹研究員)、蜷川 順子(客員研究員)

「日本言語文化学研究班」

村田 右富実(主幹研究員)、関 肇(研究員)

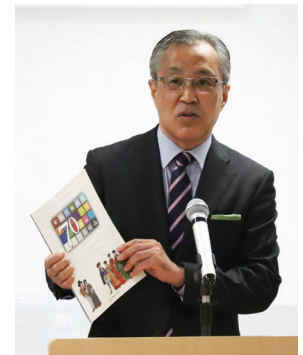


講演・発表の様子

これらの講演・発表の多くは、今年3月に刊行された『関西大学東西学術研究所創立70周年記念論文集』に掲載されている。25名の執筆する大部な論集であり、ぜひご覧いただきたい。このほか、これまでの活動内容に関しては『東西学術研究所70年のあゆみ』を作成、配布したので参照していただければ幸いである。

当研究所は長きにわたって人文学研究を牽引し、その実績により日本国内はもとより、国外においても高く評価されることとなった。ただし、取り組むべき領域はなお多く、国際化やデジタル化といった時代的要請に応える必要もいっそう増していると思われる。今回を一つの区切とし、さらなる変革と発展を期したいと考える次第である。

(東西学術研究所所長 吾妻重二)



『東西学術研究所70年のあゆみ』を紹介する吾妻所長

### ■ 創立70周年記念論文集

関西大学 東西学術研究所  
創立70周年記念論文集

関西大学東西学術研究所

2022年3月発行/479ページ

株式会社遊文舎 出版



### 編 | 集 | 後 | 記

デジタル化は、紙資源の浪費、教育格差、労働力不足など多くの社会問題を解決してくれる反面、ネット依存症、そしてウクライナ侵攻で露呈した電子戦やフェイクニュースなど、人類への脅威となる要素を孕んでいます。デジタルヒューマニティーズが今後、東西研やICISにおける学術活動の要となって世界的規模で展開していくことは疑いないものの、それがもたらす得失にもしっかりと目を向けていかなければなりません。

ICISニューズレター第8号をお届けします。研究所事務グループの方々のご協力に感謝いたします。(編集者)

表紙上掲載写真:

【左上】左: 児島惟謙館エントランス、右: 児島惟謙館外観

【左下】「東西学術研究所創立70周年記念行事」吊り看板

【右】左: 安曇川藤樹書院、右: 唐劉仁願紀功碑、扶余、663年ごろ



発行: 関西大学文化交渉学研究拠点

(Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35  
TEL:06-6368-1179 FAX:06-6339-7721

E-mail: touzaiken@ml.kandai.jp

URL www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/

発行日: 2022年(令和4年)8月

関西大学は2022年に大学昇格100周年を迎えました